

自己拡大のために教育はいかにあるべきか

How should be the Fundamental Education for Self-realization?

丸山 博道

Hiromichi Maruyama

目次

- | | |
|-----------------|--------------------|
| I. はじめに | VI. 再決断の果ての決断 |
| II. 「成人」という自我状態 | VII. 体系再生の始点 |
| III. 自己疎外からの解放 | VIII. 気づきと図式 |
| IV. 世俗世界と現実世界 | IX. おわりに 自然の中に模索され |
| V. 再決断の進化の可能性 | るべきものとしての自由 |

I. はじめに

同一タイトルの前論文（自己拡大ⁱ）では、自己拡大（大自己実現）の必要性を述べるとともに、自己拡大の方向は、天然自然の在り方に沿って、意志の自由が発揮できるようになること、すなはち、真の自由が実現されるようになることだと述べた。言い換えれば、自己拡大とは大自己実現を目指すこと、すなはち、天然自然の現実世界に自己を同一化することを目指すことであって、これが教育の原点であるべきだということだった。

さらに、同論文ⁱⁱで、自己拡大のエネルギーは、主として生命的欲求や知的欲求であるが、世俗的欲求もそのエネルギーとして活用すべきであり、それは工夫によっては、部分的にせよ可能なのだということを事例的に述べた。しかし、一般には、世俗的欲求は多岐・多様で、それぞれがきわめて安易に満たされやすいという性格のために、それを大きな流れに整流しない限り、自己拡大のエネルギーに変換することは、本質的に困難であるとも述べた。

そこで今回は、世俗化し内向化した自己意識を、個人のレベルで、自己拡大可能な方向に変容させるという問題を、Transaction Analysis（TA：交流分析）ⁱⁱⁱを傍らに置きながら、考察を進めようと思う。

これについて筆者は、前々回の論文「知性のために教育はいかにあるべきか」^{iv}で、「普遍的な道徳」に関する文末註 7) において、次のように述べている。

...Deep Ecology の提唱者 Arne Naess の Ecosophy では、その第一原理に、大文字で始まる Self-realization!（大自己実現を！）が掲げられているが^v、生態論的精神性は、存在を全方位的に把握する以外に築き得ないということから、筆者はこの「存在の全方位的把握」を Ecosophy の第一原理^{vi}としてきた。

しかし、今回この小論（知性）を執筆して、改めて考えるとき、大自己を実現しようとする知的誠実さ（知的情熱）なしに、存在の全方位的把握は不可能であり、その意味で、Naess が、Self-realization! を第一原理に据えたことは驚くべき卓見であったと思うようになった。

「存在は、全方位的に把握されねばならない」とするのは、それを普遍道德と位置付ける「成人」の意識である。成人は、この道德に基づいて、決意して大自己を実現しようとする。しかし「把握せねばならぬ」としても、本当に可能なのは、知的誠実さ（知的情熱）を有している場合に限られる。だからこの小論では、それを育てねばならぬと主張しているわけであるが、しかし Naess のような自然を友として成長した好奇心旺盛な純真な「子ども」には、自己同一世界の拡大への情熱こそ、すべての原動力であることがすでに直感されていたのである。

しかし、Naess の「子ども」は、母親の薄い愛情と無縁ではなかった^{vii}。哲学者 Naess が、生態論的精神性を獲得していったのは、少年期の自然経験と共に、後のガンジー研究が大きな働きをしたものと想像されるが、結局のところ、人は誰であれ、「成人」の自我によって、大幅に再調整されねばならない。知的誠実さが不足していれば、それは補われねばならないし、人への冷淡なまなざしは、人を全方位的に把握する中で修正されねばならない。その意味で、親は、自らの「親」の自我を、「成人」の視点から、大いに反省をして、子どもの自我の「子ども」成分を大いに成熟させることに意を注がねばならない。...

要するに、大自己実現のために決定的なことは、すなはち、生態論的精神性を獲得していくためには、各自の「親」の自我状態と「子ども」の自我状態とを、発達を遂げた「成人」の自我状態から再調整し、それら本来の機能を取り戻すことであると直感的に述べているわけであるが、これがこの自己意識の変容問題の一つの解答を示唆しているように思われるので、今回は、これについて認識を深めたいと思う。

ただ、TA の立場から見た時のその直感の妥当性は、まだ表面的・形式的なものであるように思われる。なぜなら、後述するように、TA による治療は、自己疎外をこの限られた世俗世界で救済するためのものであって、もとより大自己実現を追求するために設計されたものではないからである。そこで問題となるのが、TA の自我状態のモデルを踏襲・拡大するとしても、どのような「成人」が、どのような「親」とどのような「子ども」を実現する時に、人は大自己実現に向かい得るようになるのかということである。この考察が、この小論の内容である。

II. 「成人」という自我状態

TA における、自我状態のモデルでは、人の自己意識は「親 P」、「成人 A」、「子ども C」に分類される。さらに機能の観点から、「親 P」は、「統制的な親 Controlling Parent」と「養育的な親 Nurturing Parent」に、「子ども C」は、「順応的な子ども Adapted Child」と「自由な子ども Free Child」に分けて考えられる^{viii}。これを自我状態の機能的モデルという。

「自由な子ども」は純粹な欲求者の自己意識であり、「順応的な子ども」は子どもの頃に親に反応していた自分の行動・思考・感情が再演されている時の自己意識である。また、「養育的な親」は自分を受容し養育しようとしてくれた親の行動・思考・感情のコピーを再演している時の自己意識であり、「統制的な親」は自分に向かって様々な行動規範を与えようとしていた親の行動・思考・感情のコピーを再演している時の自己意識である、

そして、「成人 Adult」は、“TA TODAY A New Introduction to Transaction Analysis 最新・交流分析入門”の中でもしばしばその表現にニュアンスの違いを認めるが、一応、同書の索引においては、“<今・ここ>の状況に対する反応として表現される行動・思考・感情の組み合わせで、両親や親的役割の人たちからコピーしたものでなく、またその個人の子ども時代の再現でもないもの。”と規定されている。しかし、本来、それは自我状態であるから、そうした「行動・思考・感情」そのものではなく、そうした「行動・思考・感情」を表現している時に、その人が持つ「自分は成人である」という特有の自己意識を指しているものと思われる。

それに対して、筆者が用いる普遍道徳の実践者としての「成人」という概念は、筆者の Ecosophy^{ix} に由来するもので、事態を全方位的に把握し、それによって当為を導こうとする意志を持って<今・ここ>に向き合っている時の自己意識である。こうした意識は、「疎外された存在の痛み」に対する共感に由来している^x。W. Kähler が、1930 年代に、事実は単に Scalar として在るのではなく、当為を指し示す Vector として在ると述べている通り^{xi}、全方位的に把握された事態（事実）は、当為を指し示しているのである。為すべきこととは、疎外の救済以外の何ものでもない。

TA における「成人」は、「親」や「子ども」に関する過去の記憶を無意識的に再現するのではなく、<今・ここ>の問題解決のために、あらゆる資源を動員しようとする意志を持った自己意識である。しかし、必ずしも事態を全方位に把握し当為を導こうとする強い意志を持っているわけではない。したがって、その「成人」は「当面という」括弧付きの<今・ここ>、すなはち、一面的な目前の問題に対応しているだけである。当面の治療的立場に留まる限り、それで良いが、大自己実現に向かおうとすれば、さらに普遍道徳の実践者たらしめる強い意志を獲得して行かねばならない。

III. 自己疎外からの解放

生後 2 か月の幼児ですら、母親が視界から消えると、自己の存在に不安を感じて反応をする。これは最も根源的な「自己の存在確認」欲求の現れである。また、明るい電灯に興味深げに見入ったり、周囲の大人の行動に関心を寄せたり、自分でもそれを真似ようとしていたりする。このように、知りたがり、参加したがり、やってみたがるのは知的な欲求の現れであり、実験精神の萌芽である。こうした欲求は、その子の認知世界を、現実世界の姿にそって拡大

していくのに不可欠なものであり、それは、大人の自己拡大にとっても、まったく同様に不可欠なものである。

しかし、たとえば母親に抱きしめられたいと手を伸ばしても、母親が期待通りの反応をしにくれなくなったとすれば、幼児は特有の過敏な感覚で、「ああ、自分は愛されていないのだ。自分はこの不安の中で生きて行かねばならないのだ」と決断するかもしれない。そのように決断した子どもは、大人になってからも無意識のうちに、現実を、その決断を正当化するように、歪めて感じ取り、実際そのように感じられるまで、故意に自分が疎外されるように、周囲に対して行動する傾向を持っている。さらに年長になって、金品を手に入れ、これまで味わったことのないような報奨感^{xii}を得たとすれば、「自己の存在確認ができるのはこうした場面だけだ」と決断するかもしれない。

こうした決断がなされるたびに、その決断を正当化しようとする欲求が現れ、意識は次第に内向化し、常習化し、無意識化していく。決断を正当化しようとする欲求や内向した意識は、外向的であった当初の「自己の存在確認」欲求や、知的欲求が、客観的な現実世界の把握をもたらすのとは対照的に、どんどん妄想的な世界像を蔓延させる。このように妄想で肥大化した自己というものは、拡大された自己とは正反対のものである。そこに在るのは、天然自然の法則とはかけ離れた行動を繰り返し、現実世界の中で身動きが取れなくなった、不自由な存在である。

Transaction Analysis のセラピストが行っていることは、クライアントをこうしたネガティブな決断による自己疎外に気づかせ、「客観的な現実世界」^{xiii}に即した自律的な存在に変容させることである。この自律性に関して“TA TODAY”に、次のような記述^{xiv}がある。

...自律的とは絶えず「成人」の自我状態にあることではないが、世界についてのあらゆるデータは、「成人」を通して処理され、どの自我状態から反応するかを選択するのに「成人」の自我状態が保持されているのである。...自律的な自我状態の選択は慣れるにしたがって容易なものとなる。それはきわめてすばやい自然なものとなり、あたかも「成人」の自我状態がポジティブな「子ども」とポジティブな「親」の性質をその一部にあわせもっているかのようになる。このことを表すのにバーンは“統合された「成人」”という言葉を提案している。...

それは詰まる処、上に示唆したように、「成人」の自我状態から、「親」の自我状態と「子ども」の自我状態を有機的に再調整し、それらを問題解決のために自発的に一体的に運用することである。この時、「成人」は、「統制的な親」と「順応的な子ども」に対しては、過去の再演をしていることへの気づきを促して、それを停止させ、「養育的な親」に対しては、子どもの存在確認欲求や知的欲求に忠実な「自由な子ども」を最大限守り育てるように促し、また「自由な子ども」に対しては、本来的欲求に忠実であるように促して、「現実世界」に適合した行動を選択し実行するのである。

したがって、自己の拡大のために本来的に尊重されねばならないものは、「自由な子ども」

の純粋な諸欲求とそれを見守り育てる「養育的な親」と、現実に対応しようとする「成人」である。これに対し、「統制的な親」や「順応的な子ども」は、多くの場合、世俗世界での行動規範を与える者とそれに反応する者の自我状態であって、無意識的な再演に誘い込む要因、すなわち、自律の阻害要因となる可能性が高いものである^{xv}。

こうした機能的自我状態の強度分布を直感的に表したものがエゴグラムであるが、自律的であるのは、図1のような強度分布を持った自我状態である。これに対して、図2のような強度分布を持った自我状態は、自律性を欠いていて、世俗世界を漂流しやすい自我状態であると考えられる。

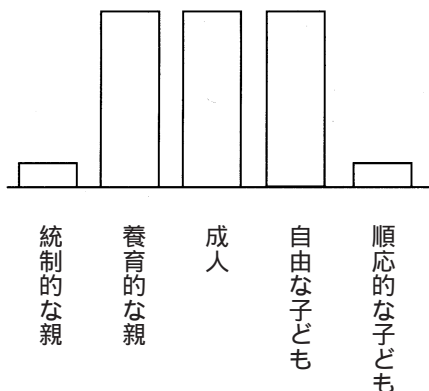


図1：自律的な自我状態

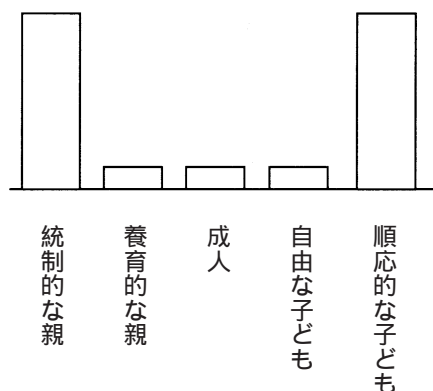


図2：受動的な自我状態

IV．世俗世界と現実世界

世俗世界こそが現実世界そのものだと思て疑わない人々もいる。しかし、それは多くの人が陥りやすいone setの決断に基づいて、現実世界に働きかけた結果生まれた、局所的かつ泡沫的世界^{xvi}であって、様々な疎外を抱え込んだ、もとより不自然なものである。あるいは、天然自然の法則を排除しているからこそ、局所に限定され、泡沫の如き姿でしか存在しえないと言うべきかもしれない。したがって、世俗世界というものは、自己拡大のために同一化されるべき世界ではあり得ない。

しかし、それにもかかわらず、「統制的な親」は「順応的な子どもに」対して、世の中というものはこういうものであるとか、この世の中に出たらこのように振舞わねばならないとか、様々な行動的規範を与える。そういう世界に産み落とされた子どもたちは、親と同じone setの決断を抱えて、生きて行く可能性が非常に高くなる、しかし、もとより無常な世俗世界は、親の世代とは異なった世界に移り変わっていたりするわけで、この世俗世界は、親からのメッセージを無意識の内に再演し、現実との齟齬にもがき苦しむ者たちを限りなく抱え込む運命にある。TA等の治療は、そうした世俗世界での救済を目指すものである。

一方、現実世界とは、幾多の泡沫的世俗世界をその上に浮かべながらも、その行く末すら

透視している確固とした天然自然の法則に則った客観世界である．そこにはたとえば地球の自然生態系も含まれれば、物質の輪廻も、宇宙の進化も、森羅万象ことごとくが含まれている．われわれが議論している自己の拡大あるいは大自己実現というものは、こうした包括的な現実世界との同一化を目指すものである．

確かに、早期の決断は機械的硬直^{xvii}ともいえる行動・思考・感情の様式の内に人間性を拘束し、自己を疎外する．この束縛から解放されない限り、自己の拡大など、いかなる意味においても不可能かもしれない．その意味で、TA セラピーでも認知行動療法でも利用可能なものは数多ある．しかし、そこで回復された自律性は極めてひよわで、普遍道徳の実践者にふさわしく鍛えられる必要がある．これはもはや治療ではなく、むしろ教育が担うべき問題であるが、前論文（自己拡大）では、抜本的な解決には、欲求ジェネレータの発達に早期に介入することが必要であって、それは特に就学開始前後が効果的であると論じた^{xviii} ところであった．しかし、これでは、＜今・ここ＞の対象者を救済することにはならない．

V．再決断の進化の可能性

病的に受動的であった自我状態から、漸くその自律性を取り戻した時点で、TAセラピストによる多くの治療は終了するであろう．治療を受けたと言っても、それは治療契約を行ったごく一部の自我状態に過ぎない．しかも、長期に亘って慣れ親しんできた認知プロセスの一部が変更されて、実際には identity の混乱を抱えながら慣らし運転をしているといった状態であろう．”TA TODAY” の記述によれば、あるいは、エリック・バーンの考えによれば、それにもやがて慣れて、“統合された「成人」” が成立するというのだが、そのように慣れただけの「成人」は、十分活力に満ちた「自由な子ども」や、それまで経験したこともない「養育的な親」の自我状態を有してはいないはずである．したがって、本物の自律性というものは、こうした契約的治療では、獲得されるものではないと考えるのが自然であろう．

TA のような治療を受けたことのある人は限られる．ほとんどの人は、決断や人生脚本から脱却するというような方法を探らずに、むしろ再決断を積み重ねながら新たな自己像を模索していくのが普通である．たとえば、次のようなプロセスが、それである．

ステップ1：

幼児にとって、寄る辺のない不安は、それを引き起こした親への怒りになる．それは物を投げるとか、破壊するといった行動になって現れる．敵対し権力的になることで自己防衛を成し遂げる．大人になってからも、すすんで周囲に敵対し、己の砦に籠城する．それを貫徹することで、親への復讐を遂げようとする．

決断：「自分を守るのは自分しかいない」

結果：「周囲に敵対し、いち早く、自己防衛の体制に入る」

期待：「自分を放置した親への復讐」

ステップ2:

また、さらに、親の気まぐれ的な愛情を受けることで、新たな決断を行う可能性がある。この世に確かなものなどないのだ。何事も吟味して係らねばならないと。その結果、社会のあらゆる矛盾を指摘することで、信用できるものなどないということを確認し、社会と打ち解けずに暮らしていく。

決断:「この世に信用できるものはない」

結果:「露悪的, 独善的, 反社会的, 自己防衛の行為を繰り返す」

期待:「親への復讐・社会の破滅」

ステップ3:

しかし、こうした人間でも、その懐疑心によって、多くの真実を見出すことがあるかもしれないし、共感できる思想に遭遇するかもしれない。その結果、現社会の矛盾の指摘ばかりでなく、その正しいあり方をも模索するようになるかもしれない。

決断:「確かなものはある。この矛盾に満ちた社会は、再生されねばならない」

結果:「現社会の矛盾を指摘し、そのあるべき姿を模索する」

期待:「生まれ直し, 生き直すこと」

しかし、この段階にあっても、強い自己防衛の姿勢や懐疑心、それに現社会に対する反逆心などはなかなか消えるものではない。彼の再生への強い願いは、むしろ、こうした屈折した決断が積み上がった結果である。

こうした事例に見るように、決断は条件が許せば、進化しうるものである。それゆえ、たとえば反社会的な段階にいる人間にも、理想社会への構築に向かわせるように働きかけることは重要な意味を持っている。マスローのように、その存在を受容すれば、もっと効果的であるのかもしれないし、また、そうした幸運に恵まれなかったからこそ、その内面に強いバネを仕込むことができたということもあるかもしれない。人はその境遇の中で、何らかの成長のきっかけをつかみ取っていく。実際、いつまでも同じ様にぐれていない人間はいないように思われる。癌化した細胞を切除して終わりというのではなく、その細胞を正常細胞へ分化するように促すような遣り方こそ、大自己実現の教育手段としては、魅力的に思われる。

VI. 再決断の果ての決断

上で、一つの再決断の進化の履歴を見た。それでは、この人間に必要な次なるステップはいかなるものであろうか。おそらくそれは、再生すべき方向性を見定めること、あるいは、何が実現されるべきかを見定めることであろう。そう考えた時、彼は思うかもしれない。この寄り辺なき不安の払拭、怒りの払拭、自己防衛の払拭、懐疑心からではない純粋な知的的好奇心の回復、自分の中に澱のように蓄積し屈折した感情すべての払拭、...。そして、最終的

に行き着くのは、「統制的でない養育的な親許での自由な子どものへの回帰」であろう。「ああ、それこそが人間存在の原点だ」と。そして、「再生すべきは、『自由な子ども』が安全に存在しうる世界なのだ」と、そう決断をするだろう。こうして、彼の心は本来あるべきところに定位されるのである。

しかし、そのように定位されたとしても、彼の中に巣食っている鬱屈した感情が即座に清算されるわけではない。彼にとって余り馴染みのない「養育的な親」は、すぐには彼の心に定着しないかもしれない。しかし、彼はあるべき社会の姿を模索する中で、「養育的な親」のイメージや重要性を掴み取っていくに違いない。そして、そうしたイメージが定着していけば、彼の中の実際の「親」は相対化されていくことになる。そして、「養育的な親」が育っていけば、彼の懐疑心は薄れ、本来の知的好奇心が蘇ってくるに違いない。それはおのずから全方位性を発揮して、「成人」の成立を支援するだろうし、「成人」は、疎外された存在の痛みへの共感から、事態を全方位的に把握し、その救済のために当為を導こうとするだろう。そのようにして、彼は普遍道德の実践者としての道を歩み出していくのである。

もし彼が疎外された存在の痛みへの共感できなかったなら、事態を全方位に把握することで当為を導こうとはしなかったであろう。それは彼が苦難の人生を歩んだことによって初めて獲得することができた思いではなかっただろうか。

TA が教えるように、親からのメッセージは、無意識のうちに人の行動・思考・感情を拘束してしまうから、自己が疎外されていることに、なかなか気づくことができない。しかし、それをセラピーに依存するのではなく、その疎外の行き着く先を見極めてみるのが、あるいは、その拘束を苦しみ抜いてみるのが、より深い気づきを生み出す可能性を高めるのではなかろうか。もしここに教育的介入があり得るとすれば、それは苦悩の極限への誘いである。再決断の履歴から次の再決断の方向をあからさまに示唆することも妥当ではなく、その気づきも可能な限り当人の苦闘に委ねるのが望ましい。敢えて言えば、教育とは、その苦悩のプロセスに長期にわたって寄り添っていくことではなかろうか。

VII. 体系再生の始点

一つの論理体系がどこまで成立しているかを明らかにすることは、その体系から脱却して新たな論理体系を構築するのに不可欠なことである。そういうことは、たとえば、物理学の近代史を紐解くだけで様々な事例に出会うことができる。それは物理学理論の発展の歴史そのものであったと言っても良いかもしれない。しかし、それまでの論理体系を忠実に適用することで、その論理の破綻を明確に示すことに寄与した人々は、ほとんどが西欧の文化圏に属する人々であったということは、何を物語っているのであろうか。それは、彼らには、他の文化圏の人びとに比べて、時間的・継続的・歴史的存在としての強い自己意識を持っているということを示しているのではないだろうか^{xix}。

それまで有効であった論理体系が、どのようにして、どこで破綻するかということには、一般には、あまり興味が示されない傾向がある。たとえば、この国の文明に関する教育がそうである。それは、～文明は、こうであった、ああであったという話で尽きている、その文明はなぜ成立し、なぜ崩壊していったのかといった問題は、あまり教育の対象にされることがなかったように思われる。しかし、それは、今の都市文明が崩壊する時が来るかもしれないということを、人々に考えさせないでおく絶大な効果を持っている。過密都市が大震災を受けても、人々は、それをひとえに天災だと思いなして、その都市がいかなる不自然な存在であったのかという反省もないままに、一日も早い復興を叫び、闇雲に邁進する。

また、様々な金融商品がそうである。人々は、それらを美味しそうな話として関心を示すが、それらがどのように破綻していく運命にあるのかといったことには、ほとんど目を向けることがない。それらが破綻をきたし、経済を大混乱させても、少なくとも自分には一切責任のない一種の天災だと看做すのである。そうした商品の不自然さについて十分考えなかった当事者責任というものをまったく放棄しているのである。こうしたことは、いわゆる科学技術の領域においては、もっと甚だしいものがある。

人間の苦悩に関しても、一種の外来の災難であると思っている節がある。なぜそれは生じてきたのか、どうすればそれは解消するのかということに関しては、一切自分の関わるべきことではないという姿勢である。関与するのは、料金を丸投げしたセラピストの仕事だと思っているのである。

しかし、論理的体系の有効範囲は一般に有限であるということは経験則として認めねばならない。われわれがそうした体系に関与する時には、その限界を見定めることは、自己責任に属することである。その本質的な理由は、一つの論理体系が破綻して、新たな体系を構築しようとする時には、われわれは、常にその旧体系の破綻点から再出発して、旧体系と連結するような体系を再構築せねばならないからである。

したがって、単に苦悩が解消すれば良いということではない。己のどこが破綻していたのかを知らねば、どのように自己のシステムを、過去のシステムと連続したものとして、再構築したらよいか見当もつかない。その破綻点の見極めということと、再構築の方法については、セラピストに支援してもらえとしても、それを理解し、実際に再構築の作業をするのは、当人の仕事であるということは、弁えていなければならない。したがって、精神科を受診する場合には、必ずその契約を結ぶことになるはずである。

教育も基本的に同じことである。教師にできることはセラピストと変わらない。学生がどこで、なぜ行き詰まったのか、いかに再出発すべきなのかを指摘できても、それを実際に実行できるのは当人だけである。この破綻と再構築の営みを、繰り返して継続させ、彼の自我を人間存在の原点、すなはち、「養育的な親」許での「自由な子ども」に導くことが、教育の役割である。しかし、多くの学生たちは苛立ちを隠さない。商業主義に毒された人間たちには、妄想の実現だけが現実の課題になっている。

VIII．気づきと図式

われわれは、確かに人の親になることで、親の苦勞や、子どもの頃の自分の姿に気づくことは多い。しかし、自分の親としての振舞いが、自分の親のコピーであり、今の自分の行動が、子どもの頃の再演であって、そこに自己疎外の原因があるなどということは、その親が余程目に見えて異常でない限り、まず気づかれることはない。むしろ再演されている自己こそ、自己そのものの姿であるとすら感じている。自己疎外など露ほども疑われてはいない。また、われわれは、早期の決断を正当化するように無意識のうちに世界に介入している。これについては、世界からの反作用を受け取ることになるので、不可解な不快感を覚えることにはなるが、その不快感が、決断なるものの結果であるとか、その決断がある種の期待を孕んでいるなどといったことには、一切気づいてはいない。

気づくということは、一般に、認知のスキーマ（図式）を手に入れ、それに照らして、「ああ、それだ！」と悟ることである。問題は、認知スキーマを手に入れることである。そのためには、どうしても同様の事態を繰り返し経験し、図式として抽象化することが欠かせない。図式らしきものができても、本当に適用可能なものにするには、さらなる経験を通した検証と洗練化のプロセスが必要になる。生き物は、物に対しては、驚くほど速やかにそれを達成するが、人間の諸現象に関しては、あまりにも複雑かつ不可解で、苦闘なしに図式は獲得できない。

上で述べた自我に関する事実は、精神分析や Transaction Analysis の研究者たちの長年の苦闘によって明らかにされてきたことであるが、研究の果実は人類の共有財産として、われわれもそれを学ぶことができる。むしろその理解は研究者の比ではないとしても、一応、図式を手に入れることはでき、その図式を通して、それなりの気づきを得ることができる。こうした図式は、うつ病のモデルで有名な Beck の図式^{xx} 同様、人々に、人生の苦悩について、その気づきを与えることに役立つ。

苦闘の末の気づきは尊いものではあるが、筆者自身も寿命の尽きる前には、大自己実現に向かっていたと思うし、いつまでも若者に寄り添っていることもできない。したがって、誰にとっても、藁をも掴む思いで、先人の知恵を学ぶことは、やむを得ないことではある。しかし、苦闘した後でなければ、十分には学べないし、軽やかに学んだとしても、深い気づきをもたらされない。これも認知科学上の経験則である。したがって、気づくための大原則は、あくまでも苦闘して図式を手に入れることであり、そして、やむを得なければ、それを先人に学べということである^{xxi}。

IX．おわりに 自然の中に模索されるべきものとしての自由

人間は、誰もが自己を疎外しながら、それに気づいていないことがある。あるいは、それを感じていても、それが自分らしさであると思い、受容しがちである。確かに、父親そっく

りの行動をして、思わず苦笑している人間を、微笑ましく思っていたりする。しかし、息子が、自分そっくりの考え方・感じ方をするのを見て、「ちょっと、まずいぞ」と焦ることもある。それは息子もまた父親と同じ未達成を抱え込むだろうと予感するからである。

大自己実現は、筆者にとっては究極に近い課題であって、Naessのように、それを Ecosophy の第一原理に置くことは難しい。筆者にとっての第一原理は、普遍道徳の実践者たらんとする意志を持つことであるが、この小論の議論によれば、その為にさえ、再決断を進化させながら、「統制的でない養育的な親許での自由な子ども」へ回帰することによって、すなはち、人間存在の原点に戻ることにによって、自己疎外から脱却することが必要になるのである。

親から生まれながら、「親」から脱却することなしに、人間存在の原点に戻れないという、この不合理を最小限に食い止めるためには、やはり、欲求ジェネレータの発達に対して、早期の教育的介入を考えねばならない。それは、自我の癌化を予防するために、子どもたちの「自由な子ども」を復権し、地球生態系との同一化を含む自己拡大（大自己実現）に向かわせ、真に自由な生き方を獲得させるためである。

われわれ旧来の人間たちの生活体系と、こうした「自由な子ども」たちの生活体系は、まさに、「自由」というものの捉え方において、大きな相違が存在している。旧来のそれは bourgeoisie という新勢力が、封建領主や宗教権力から自分たちの権益を守るために発明したまやかしの「神の前の自由」であったり、絶対的無制約性に拘った観念論的な「意志の自由」^{xxii} であったり、あるいは、まやかしの「神の前の自由」を引き継いだ自由主義のそれと行った、まさに人間中心主義的な自由であった。しかし、新しい体系での自由は、真に神の前に展開されている自由に、すなはち、「被造物全体が有する天然自然の法則に」従うことが、最大の自由なのである^{xxiii}。

癌化した自我を切除するよりも、それを正常な自我に分化させることは identity の連続性という意味で魅力的であるが、それには再決断を進化させる個々人の苦闘が必要である。そして、癌化を予防することは、大自己実現に向けた活動に、より多くの時間が割けるという意味で、もっと魅力的であるが、それには欲求ジェネレータへの早期の教育的介入が必要で、もしそれを公的な教育に位置付けようとするれば、自由についての新しい考え方を世界に浸透させるために、Naess の Deep Ecology^{xxiv} 運動と連動するような、新たな啓蒙運動が必要になる^{xxv}。

東洋においては、比較的穏やかな環境のお陰で^{xxvi}、あるいは、animism や、道教・儒教・仏教の影響下で、天然自然の在り方を受け入れようとする精神性が浸透しているが、決してそれでよしという話ではない。そうした精神性は、全方位的な、あるいは生態論的な把握に基づいて、対象系の存在性を具体的に受容しようとする、生態論的精神性に高められる必要がある。そうでなければ、新しい自由を正しく機能させることはできない。自由は、観念論的・先験的に在るのではなく、自然の中に模索され、自然によって許容されるべきものとして在るのである。

注・参考文献

- i 丸山 博道,自己拡大のために教育はいかにあるべきか,名古屋経営短期大学 紀要 50 号,2009, . 教育が大自己を目指すべき理由 .
- ii Ibid . . 経済社会の変容が脳の発達に及ぼす影響, . 調和ある自然・社会生態系の学習と適塾流の世俗的教育法の結合, . 世俗的欲望を梃子にした自己拡大 .
- iii Ian Stewart & Vann Joines, TA TODAY, 1987. 深沢 道子 監訳, TA TODAY - A New Introduction to Transaction Analysis? 最新・交流分析入門,実務教育出版,1991 .
- iv 丸山 博道,知性のために教育はいかにあるべきか,名古屋経営短期大学 紀要 49 号,2008, . 知的不誠実さを生み出す土壌,1. 一面的教育の不道徳性,“ 普遍的な道徳 ” の文末注 .
- v Arne Naess. Ecology, community and lifestyle, Cambridge University Press, 1989.7 Ecosophy T: unity and diversity of life. 8 The systematization of the logically ultimate norms and hypotheses of Ecosophy T. (b) Formulation of the most basic norms and hypotheses.
- vi 丸山博道,Ecosophy の第一原理と道徳性,名古屋経営短期大学 紀要 45 号,2004. . Ecosophy の第一原理に置かれるべきもの? 存在性の立ち上げ - .
- vii David Rothenberg, IS IT PAINFUL TO THINK?, University of Minnesota press, 1993.
- viii TA TODAY,第2部 パーソナリティを描く - 自我状態のモデル,第2章 自我状態モデル,第3章 自我状態の機能分析 .
- ix vi 参照 .
- x 丸山 博道,関係場と存在,名古屋経営短期大学 紀要 42 号,2001. . 存在を認知するために必要な姿勢 .
- xi 1. Köhler. W. The Place of Values in a World of Facts, New York: Liveright, 1938.
2. Abraham H. Maslow. The Farther Reaches of Human Nature, 1971 . 上田吉一 訳,人間性の最高価値,1994 . p32 , p140 .
- xii 丸山 博道,自己拡大のために教育はいかにあるべきか,名古屋経営短期大学 紀要 50 号,2009, . 知欲の冬眠現象の諸要因 .

褒められた時の脳の活性化部位と,金品等を貰った時の活性化部位が同じであることから,褒められた経験の乏しい子どもは,金品を手に入れることで報奨感を得ていることが考えられる .
- xiii これは括弧つきである . 実際には,当面の世俗的世界というべきである .
- xiv TA TODAY,第27章 TA における変容の目的,脚本から自由になること, p341 .
- xv 「統制的な親」が常にネガティブなものというわけではない . 「世俗に漂流してはいけない」というのは正しいメッセージであるかもしれない . しかし「自由な子ども」が「養育的な親」許で育っていけば,こうしたことは,自ら悟ることである .
- xvi 丸山 博道,自己拡大のために教育はいかにあるべきか,名古屋経営短期大学 紀要 50 号,2009, . 経済社会の変容が脳の発達に及ぼす影響

...現在,金融バブルが崩壊して実体経済が縮小したと云われているが,実は,実体経済と言われているものでさえ,地球や人間の真の必要という観点からすれば,実に不要物の生産と消費の活動であって,必要に根ざした真の実体経済からは大きく乖離したもので,すなわち,バブル経済そのものである . 現在の経済は,泡の上に泡が積み上がった不安定なもので,多くの人間が依存すれば,それだけ多くの人間が不幸に見舞われるということが運命づけられている

- xvii ベルグソンの「笑い」(岩波文庫)によれば、機械的硬直は本来的に笑いの対象となるべきものである。したがって、もし、親そっくりの行動をして、思わず笑ってしまったとすれば、それはその機械的硬直に気づいたからである。しかし、その硬直性に気づかなければ、不可解な苦痛だけが残存することになる。
- xviii 丸山 博道,自己拡大のために教育はいかにあるべきか,名古屋経営短期大学 紀要 50 号,2009, . 経済社会の変容が脳の発達に及ぼす影響
- ...しかし、彼らの世俗的欲求を規制したのでは、それを自己拡大の梃子にすることはできないから、その生成ジェネレータは、自然・社会生態系と調和する欲求だけを生成するように TUNING されることが必要である。それを可能にするには、勝手な欲求に塗れる前に、「望ましい自然・社会生態系における幸福な存在のあり方」を学習させて行く以外にはない。...しかし、これが洗脳でないためには、真に「神の前の自由」に則った教育である必要がある。
- xix 旧体系を置き去りにしていくという遣り方は、そこに関与してきた者には耐えがたいものである。新体系との連続性を図り、どこまでが保存され、どこが変更されるべきであるのかを明確にして、はじめて自己存在の確認ができるのである。それは、そこに関与している自己が、時間的・継続的な存在、あるいは、歴史的存在であるからである。要するに、われわれは<今・ここ>の存在であると同時に、誕生以来の過去的存在でもあるから、その間のいかなる時点においても、存在確認ができることを要求するのである。
- xx 1. アーサー・フリーマン 著、遊佐安一郎 監訳、認知療法入門、1989。第一章 認知療法概観、および巻末文献
2. Dean Schuyler, A PRACTICAL GUIDE TO COGNITIVE THERAPY. 高橋 祥友 訳、シューラの認知療法入門、金剛出版、1991。第3章 認知療法への序章、認知療法。
- xxi 最近はこの原則が失われつつあるように思われる。安直に学ぶことすら、この原則に反するのに、安直に教えようとするなど、教育とは別次元のものである。
- xxii 熊谷 正憲, N・ハルトマン自由論の研究、淡水社、1991。
- xxiii 丸山 博道,自己拡大のために教育はいかにあるべきか,名古屋経営短期大学 紀要 50 号,2009, . 教育が大自己を目指すべき理由。
- ...一方的に有効である技術などはありません、それはまた新たな不自然を生み出すことを覚悟せねばならない。技術というものは、自然の原理に基づくものではあるが、その原理を発現させる「仕掛け」に作為があり、不自然さがある。創造主は、それを発現させる遣り方をも含めて、自然さを規定しているのである。...
- 要するに、個別の自然原理に従うばかりではなく、その発現のあり方にも自然性が要求されている。そうした自然性に抵触したところには、いかなる自由も存在しない。
- xxiv 1. Bill Devall. George Sessions. Deep Ecology. Gibbs Smith. 1985.
2. George Sessions. Deep Ecology for the 21st Century. Shambhala. 1995.
3. Eric Katz. Andrew Light. David Rothenberg. Beneath the Surface Critical Essays in the Philosophy on Deep Ecology. The MIT Press. 2000.
- xxv 自由を絶対的無制約的なものとして規定しようとする観念的試みや、まやかしの神の前の自由は、人間存在を生態論的に位置づけることに、ことごとく失敗してきた。しかし、それらの「自由」も、或る人々にとっては、人格形成の支えであり、社会活動の支えであった。しかし、そのことが、人びとを、旧体系に縛りつけ、新たな体系への移行を困難にしている。そうした古い「自由」に加担してきた人びとには、その体系限界の見極め責任があり、生態論的精神性の浸透に責任を持つようとする人びとには、旧き人々の体系連結作業において、それを支援する義務がある。
- xxvi 和辻哲郎, 風土 人間学的考察, 岩波書店, 1979。